

巻頭言

大阪医科薬科大学医師会創立77周年を祝う — 大学病院全建替事業完了と併せて —

学校法人大阪医科薬科大学 名誉理事長・相談役

植木 實 [元大阪医科大学医師会長(1991～1997年)]



この度、大阪医科薬科大学医師会が設立77周年を迎えられ、また本法人が2012(平成24)年から進めました大学病院診療系建物の全建替事業が完了しましたことは誠に喜ばしく、皆で杯を上げたいと思います。

本医師会の設立は、届出資料を見ますと1948(昭和23)年3月でした。初代会長は内科学の岩田秋之助教授で、会員数は59名でありました。昭和40年代の学園紛争を機に教員組合の設立、助教授会及び講師会の設置、その他に病院長の選挙規程の策定がなされ、学内の民主化が進みました。当時の医師会長は助教授の川上勝朗先生が務めておられ、その後は関一郎先生に変わり、その頃から本医師会では三島地区の病診連携のベースとなる症例検討会が開始されています。

1991(平成3)年の私の会長就任当時、医師会員は100数十人でしたが、1993(平成5)年頃にさらに会員を増やそうと専攻医(無給医)の方々にも積極的に声をかけた結果、300～400人に増え、その無給医の会員の方々も医療事故賠償保険に加入することができました。

また、1994(平成6)年には本館・図書館棟が完成して立派な図書館ができましたことを記念して400万円相当のウルゴス社の床置時計(写真)を本医師会から寄贈しました。この重厚感のある床置時計は図書館の入り口に置かれており、30年以上経った今も変わらずに時を刻んでいます。

1995(平成7)年は阪神・淡路大震災が生じ、大学の総合研究棟の上層階は水道の破損などで水浸しになったり、本棚が倒れて書籍が散乱するなどの被害がありましたが、幸い教職員に死傷者は出ませんでした。しかし、神戸、芦屋、西宮市在住の教職員の中には家屋が崩れるなど大きな被害を受けた方もおられ、本医師会からは被災された19名の方々に各々5万円の御見舞金をお贈りし、大阪府医師会からの災害援助金要請にも30万円をお渡し致しました。



その後、1999(平成11)年に大阪府医師会は会員の会費の値上げを図りましたが、当時、あちらこちらで医師会役員会を開き、その都度、派手な宴会をしていることは有名でしたので、私は値上げする前にそのような無駄遣いや出席する代議員の電車代の抑制などを図るよう代議員会で発言致しました。当時の役員達は驚いたようで、取りあえず決定を先延ばしにしましたが、結局は会費は値上げになりました。それに抗議する意味で、私及び本医師会のA会員はC会員に切り換え、その分の医師賠償保険は大学の西泉(現 大阪医薬大サービス)の保険に加入するなどの対抗措置をとりました。少なからず、大阪府医師会には反省を喚起できたと思っています。

こうして振り返りますと、いろいろな出来事がありながらも大阪医科薬科大学医師会はよくまとまり、今では会員も572名(2025(令和7)年8月1日現在)にまで増えて成長しています。後に大阪府医師会から『保健文化賞受賞記念大阪府医師会長賞』を表彰されましたことは、本医師会の北摂地区での地域連携や学術活動などが高く評価された結果であり、大学の医師会としては珍しい活発な運営だったと思われ、現在も年2回の内容ある会報の発行は勿論、様々な事業が継続されております。

さて、この度、建築中でありました病院新本館B棟が本年5月に無事竣工しました。本法人は2012(平成24)年から大学病院全建替事業に着手し、その嚆矢として2016(平成28)年に中央手術棟が新築・開院し、「24時間体制で断らない手術室」を実践しています。その後、2018(平成30)年に竣工した関西BNCT共同医療センターでは、保険診療が適用された進行頭頸部がんに次世代がん治療法「BNCT(ホウ素中性子捕捉療法)」を行って素晴らしい成績をあげています。そして、建替事業のメインであり大阪医科大学創立100周年記念事業として位置付ける病院新本館は、2022(令和4)年にA棟が竣工・開院し、救命救急センター、各種検査センター及び化学療法を含む先進的ながん医療総合センターなどが順調に稼働しています。同時に中央エネルギー棟も竣工し、本部キャンパス全体の電力や空調・温水等の環境に配慮した効率的な管理を担っています。この度のB棟竣工によって、先に開院したA棟と合体して病院新本館が完成・全面開院することになり、第1研究館も竣工したことから、診療系建物の建築工事は完了致しました。

病院新本館は「超スマート医療を推進する大学病院」を基本方針に掲げ、AIを積極的に活用した高い機能と設備を備えた高度先進医療の拠点となるよう建築が進められました。一方で「心地よい環境の提供」をコンセプトに据え、自然と触れ合うことで幸せを得られる“バイオフィリア”の考えを採り入れ、院内のインテリアも癒しや温もりを感じる自然や動物をモチーフにデザインするとともに、大原美術館と直結して貴重な所蔵作品の数々を鑑賞できる大型デジタルサイネージを設置し、患者さんが少しでも心休まる空間を設けています。

本大学病院は、今後とも病院新本館の全面開院を契機に、患者さんに寄り添える「スーパースマートで温かみある病院」を目指し、全員がホスピタリティある対応をとるよう接遇面の向上にも取り組

んでまいります。

私は、病院長、学長を経験後、15年余り理事長職を務めさせていただきましたが、高齢になりましたので本年6月を以って職を辞することに致しました。振り返りますと、その間に3つの大きな事業を経験しております。

1つ目は2度の法人合併で、最初の高槻高等学校との合併は2014(平成26)年に岩井常務理事のご尽力もあり円滑に進み、次の大阪薬科大学との合併は2016(平成28)年に濱岡副理事長のご尽力により本邦では初めてといわれる1対1の対等合併が行われました。新しく誕生した大阪医科薬科大学は医学・薬学・看護学の3学部とそれぞれの大学院並びに特定機能病院である大学病院を有し、また中学校・高等学校を擁する医療系大学・学園となり、財政基盤も強固になり、非常に順調に運営されそれぞれ成長しています。

2つ目は約14年を要した大学病院全建替事業で、工事は順調に進み、診療系建物は大学を含めてほぼ完了しました。後は講堂・管理合同棟の建築が残っていますが、現在の病院の正面にあります1、2、3号館の解体を行いますと、新築の病院本館が正面に出て前面は緑豊かなプロムナードのある広場になり終了します。

3つ目は、本大学の宝物となった新しいがん治療法であるホウ素中性子捕捉療法(BNCT)施設を設置したことです。現在、実践治療を行いながら更なる改良を進めており、がんの治療方法として第4番目の治療法になる可能性が極めて高くなりました。この治療法は全ての臓器のがんに効果があることが判明しており、機器・薬剤・照射法などの更なる改良により素晴らしい治療法に発展すると思われます。すでに中国は注目してしまして、本学と同型のサイクロトロン(小型の中性子発生装置)の3台が輸出され、当地から研修生が本学の同施設に研修に来るなどしており、本邦は規制が強いので恐らく中国で急速に発展すると思われます。

最後になりましたが、本法人は2年後の2027(令和9)年に大阪医科大学創立100周年を迎えます。最優の医療系大学・学園を目指し、今後は佐野理事長と濱岡副理事長を中心に、私も微力ながら協力し、力を合わせて更なる成長・発展に尽力して参ります。

本医師会の先生方におかれましても、引き続きご指導とお力添えを賜りますようお願い申し上げますとともに、本医師会の益々の発展を祈念致します。